

## 学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

|                          |        |
|--------------------------|--------|
| 学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要） | 研究 0-1 |
| 1. 畜産学部・畜産学研究科           | 研究 1-1 |
| 2. 原虫病研究センター             | 研究 2-1 |



## 学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

| 学部・研究科等     | 研究活動の状況     | 研究成果の状況     | 質の向上度      |
|-------------|-------------|-------------|------------|
| 畜産学部・畜産学研究科 | 期待される水準を上回る | 期待される水準を上回る | 改善、向上している  |
| 原虫病研究センター   | 期待される水準を上回る | 期待される水準を上回る | 高い質を維持している |

## 注目すべき質の向上

## 原虫病研究センター

- 『研究論文の日本の大学ベンチマーキング 2015』の中の「サブジェクトカテゴリから見る日本の大学の状況」では、寄生生物学分野において、論文数は国内 1 位、世界 48 位、被引用数は国内 5 位、世界 158 位となっている。



**畜産学部・畜産学研究科**

|    |       |        |
|----|-------|--------|
| I  | 研究の水準 | 研究 1-2 |
| II | 質の向上度 | 研究 1-4 |

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学内共同の教育連携施設である地域連携推進センター内にインキュベーションオフィスを設置し、平成27年度までに8社の企業が入居して共同研究を行っている。
- 知的財産権の保有状況について、産業財産権の保有件数は、平成21年度の1件から平成27年度の54件へ増加している。また、平成27年度におけるライセンス契約の件数は8件（約17万円）となっている。
- 寄附金の受入金額は、平成21年度の約4,540万円から第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の平均約7,710万円へ増加している。また、研究助成の受入状況は、平成21年度の7件（約650万円）から第2期中期目標期間の平均13件（約1,780万円）へ増加している。
- 獣医学及び農畜産学分野において世界水準の教育研究活動を実施するため、平成25年度にコーネル大学（アメリカ）、平成26年度にウィスコンシン大学（アメリカ）と学術交流協定を締結し、応用獣医学分野、畑作物分野等の共同研究を実施している。
- 科学研究費助成事業の採択状況は平成21年度の42件（約1億2,000万円）から第2期中期目標期間の平均52件（約1億5,000万円）へ増加している。

以上の状況等及び畜産学部・畜産学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

### 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、遺伝育種科学において特徴的な研究成果があり、日本酪農科学会・学会賞等、5件の受賞がある。

- 卓越した研究業績として、遺伝育種科学の「コムギ種子に関する品質向上に関する研究」があり、論文はインパクトファクター9.34の学術誌に掲載されている。
- 特徴的な研究業績として、応用生物化学の「ヒト固有のミルクオリゴ糖に関する研究」及び「ウシをはじめとする家畜ミルクオリゴ糖に関する研究」、獣医学の「マダニ媒介人獣共通感染症の原因菌である *Anaplasma phagocytophilum* および *Anaplasma bovis* の日本生息の実証」等がある。
- 社会、経済、文化面では、環境技術・環境負荷低減において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、環境技術・環境負荷低減の「堆肥化過程における温室効果ガス排出特性の解明および温室効果ガス排出抑制・省エネ化システムの開発と製品化」があり、効果的な堆肥化技術の発展に寄与している。

以上の状況等及び畜産学部・畜産学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、畜産学部・畜産学研究科の専任教員数は124名、提出された研究業績数は26件となっている。

学術面では、提出された研究業績23件（延べ46件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は7割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績4件（延べ8件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は9割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## Ⅱ 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 科学研究費助成事業の採択状況は平成 21 年度の 42 件（約 1 億 2,000 万円）から第 2 期中期目標期間の平均 52 件（約 1 億 5,000 万円）へ増加している。
- 寄附金の受入金額は、平成 21 年度の約 4,540 万円から第 2 期中期目標期間の平均約 7,710 万円へ増加している。また、研究助成の受入状況は、平成 21 年度の 7 件（約 650 万円）から第 2 期中期目標期間の平均 13 件（約 1,780 万円）へ増加している。
- 知的財産権の保有状況について、産業財産権の保有件数は、平成 21 年度の 1 件から平成 27 年度は 54 件へ増加している。また、平成 27 年度におけるライセンス契約の件数は 8 件（約 17 万円）となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 教員一人当たりの学術論文・著書数は、第 1 期中期目標期間の平均 2.79 件から第 2 期中期目標期間の平均 2.84 件へ増加しており、国際的に著名な学術雑誌に 649 件の論文を掲載し、5 件の学会賞を受賞するなどの研究成果をあげている。
- 平成 27 年度の科学技術政策研究所の発行する「研究論文に着目した日本の大学ベンチマーキング 2015」の「サブジェクトカテゴリから見る日本の大学の状況」において、学術論文の被引用数が獣医学分野において平均 136 件、農畜産学分野において平均約 68.8 件となっている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

## 原虫病研究センター

|    |       |       |        |
|----|-------|-------|--------|
| I  | 研究の水準 | ..... | 研究 2-2 |
| II | 質の向上度 | ..... | 研究 2-4 |

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目 I 研究活動の状況

#### 〔判定〕 期待される水準を上回る

#### 〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 教員一人当たりの英語の原著論文数は、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）の平均3.59件から第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の平均5.31件となっている。
- 国際会議・シンポジウム及び国際学会発表・講演の件数は、平成21年度の1件から平成27年度の9件となっている。
- 産業財産権の保有件数は平成21年度の0件から平成27年度の13件となっており、平成27年度におけるライセンス契約の件数は2件となっている。
- 科学研究費助成事業について、教員一人当たりの採択状況は平成21年度の0.88件（320万円）から平成27年度の2.20件（710万円）となっている。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間における共同研究員の受入は延べ416機関（1万2,688名）となっており、平成21年度の33名から平成27年度の659名へ増加している。
- 国際共同研究・共同研究プロジェクトの実施件数は、平成21年度の10件から第2期中期目標期間の平均13.7件へ増加している。
- センターが主催したシンポジウム、セミナー等の開催件数は、平成21年度の5件から第2期中期目標期間の平均15.3件へ増加している。

以上の状況等及び原虫病研究センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

### 〔判定〕 期待される水準を上回る

#### 〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、獣医学において特徴的な研究成果がある。また、科学技術政策研究所から公表された『研究論文の日本の大学ベンチマーキング 2015』の中の「サブジェクトカテゴリから見る日本の大学の状況」では、寄生生物学分野において、論文数は国内1位、世界48位、被引用数が国内5位、世界158位となっている。
- 特徴的な研究業績として、獣医学の「牛小型ピロプラズマの進化と遺伝子多型」があり、スリランカ科学論文大統領賞を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、寄生虫学（含衛生動物学）において特徴的な研究成果があり、国際社会への貢献を目指し、国際獣疫事務局（OIE）のコラボレーションセンターとして、「国際標準家畜感染症予防・診断マニュアル」の作成・改訂を実施している。
- 特徴的な研究業績として、寄生虫学（含衛生動物学）の「難治性原虫病感染症に対する新規ワクチン技術の開発研究」があり、成果物である感染症ワクチンは日本、米国、オーストラリア、ニュージーランドで特許を取得している。

以上の状況等及び原虫病研究センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、原虫病研究センターの専任教員数は10名、提出された研究業績数は3件となっている。

学術面では、提出された研究業績3件（延べ6件）について判定した結果、「SS」は3割、「S」は7割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績1件（延べ2件）について判定した結果、「SS」は5割、「S」は5割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## Ⅱ 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 教員一人当たりの英語の原著論文数は、第1期中期目標期間の平均 3.59 件から第2期中期目標期間の平均 5.31 件へ増加している。
- 第2期中期目標期間における共同研究員の受入は延べ 416 機関（1万 2,688 名）となっており、平成 21 年度の 33 名から平成 27 年度の 659 名へ増加している。
- 国際共同研究・共同研究プロジェクトの実施件数は、平成 21 年度の 10 件から第2期中期目標期間の平均 13.7 件へ増加している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 獣医学の「牛小型ピロプラズマの進化と遺伝子多型」では、牛小型ピロプラズマ病のワクチンの開発に成功しており、この研究成果についてスリランカ科学論文大統領賞を受賞している。
- 寄生虫学（含衛生動物学）の「難治性原虫病感染症に対する新規ワクチン技術の開発研究」は、日本、米国、オーストラリア、ニュージーランドで特許を取得している。
- 『研究論文の日本の大学ベンチマーキング 2015』の中の「サブジェクトカテゴリから見る日本の大学の状況」では、寄生生物学分野において、論文数は国内 1 位、世界 48 位、被引用数は国内 5 位、世界 158 位となっている。
- 国内外の研究機関等との共同研究により、馬ピロプラズマ症に対する診断法を開発し、平成 22 年度から農林水産省の検疫で採用されている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

### 2. 注目すべき質の向上

- 『研究論文の日本の大学ベンチマーキング 2015』の中の「サブジェクトカテゴリから見る日本の大学の状況」では、寄生生物学分野において、論文数は国内 1 位、世界 48 位、被引用数は国内 5 位、世界 158 位となっている。